

キャリア体験学習(国際・台湾)における 学生の経験と変容

法政大学キャリアデザイン学部 教授 松尾 知明

はじめに

法政大学キャリアデザイン学部では、2018年より、キャリア体験学習(国際・台湾)を実施している。このプログラムは、日本との関係が深いものの理解のあまり進んでいない台湾を事例として、グローバルな視野に立ったキャリアデザインについて考察することを目的としている。同プログラムは、春学期の事前学習、台湾での体験学習、秋学期の事後学習から構成され、①台湾の歴史や社会、文化、人々についての理解を深め、②交流のための中国語の初歩を学び、③台湾の大学生、企業、法政大学台湾校友会会員の方々との交流、および、④現地台湾でのインターンシップを行うことで、⑤グローバルなキャリアデザインについての考察を深めるものである。

本稿は、A～Jの10名の履修学生による自己評価、授業での課題とレポート、報告書などにみられる学生による記述をもとに、キャリア体験学習(国際・台湾)において学生が何を経験しどう変容したのかを明らかにすることを目的としている。

1章においてキャリア体験学習(国際・台湾)の概要に触れた後、2章ではキャリア体験学習の前後での変化、3章ではキャリア体験学習の4つの経験((1)現地でのインターン、企業等訪問、(2)法政大学台湾校友会の会員へのインタビュー、(3)元智大学学生との交流と寮生活、(4)台北、台中、

台南でのフィールドワーク)を明らかにし、4章においてキャリア体験学習を終えての気づきや学び、培った力などについて検討したい。

1 キャリア体験学習(国際・台湾)の概要

2024年度のキャリア体験学習(国際・台湾)の概要については、春学期の授業では、台湾を知るために、地理・歴史、社会・文化、政治・経済、台湾人のアイデンティティなどに焦点をあて、調べ学習や聞き取り、文献研究などをもとに、台湾とはどのような場所か、キャリアのあり方は日本とどんな違いがあるのかなどの問いに答える形で、台湾についての理解を深めていった。また、オンラインで台湾の元智大学学生と交流したり、台湾からの留学生から話を聞いたりした。これらの学習を踏まえて、台湾でのキャリア体験学習における課題を設定し計画を立てた。並行して、春学期を通して現地での交流を行うために中国語の初歩を学習した。

事前指導を踏まえ、台湾でのキャリア体験学習では、8月2～12日の11日間、企業等訪問、インターン、法政大学台湾校友会会員へのインタビュー、元智大学の学生との交流や寮生活、台北、台中、台南でのフィールドワークなどを実施した。台湾でのキャリア体験学習の日程については表1に示す通りである。

表1 2024 年度キャリア体験学習の日程

	場所	活動内容	ねらい	食事
1日目 8/2 (金)	東京 台北	成田(11:45)→桃園(14:30) →元智大学		夜 各自
2日目 8/3 (土)	午前 午後 夜	9:00 オリエンテーション 元智大学学生との交流 14:30-16:30 台湾法政校友 会会員へのインタビュー 17:00 企業関係者・校友会 会員との顔合わせ・交流会	・体験学習の目的を確認し、安全で有意義に体験学習を進める見通しをもつ。 ・台湾法政校友会会員へのライフストーリー①を聞き取り、異なる文化での経験がキャリア形成に及ぼす影響について考える。 ・企業、台湾校友会会員の方々与中国語も使いながら積極的に交流する。	朝 各自 昼 あり 夜 あり
3日目 8/4 (日)	午前 午後 夜	元智大学学生と台北フイ ールドワーク Zoom MT(Meeting) 21:30	・台北でフィールドワークを行い、歴史・文化の理解を深める。	朝 各自 昼 各自 夜 各自
4日目 8/5 (月)	午前 午後 台南 夜	8:00 移動 九族文化村 14:30 ホテルで解散→台南 フィールドワーク ホテル集合・MT 21:30	・バスで移動 ・原住民の歴史や文化を知る。(昼は村内) ・グループごとに散策して、台南の歴史・文化の理解を深める。延平郡王府、安平古堡他	朝 各自 昼 各自 (村内) 夜 各自 (夜市など)
5日目 8/6 (火)	午前 午後 夜	8:00 八田技師記念室 14:00 台中フィールドワ ーク ホテル集合・MT 21:30	・八田与一について知る。(昼食は公園内) ・グループごとに散策して、台中の歴史・文化の理解を深める。 ・食事後にホテル集合。ミーティング。	朝 あり 昼 あり 夜 各自
6日目 8/7 (水)	午前 台北 午後	三信商業銀行 10:30-11:00 移動 新竹サイエンスパーク資料 館	・企業を訪問し、ライフストーリー③について聞き取りをする。 昼は軽食 ・資料館を訪問し、聞き取りをする。	朝 あり 昼 各自 夜 各自
7日目 8/8 (木)	台北 夜	台北での企業等インターン シップ1日目 Zoom MT 21:30	・台北での企業でインターンシップに課題をもって意欲的に参加する。	朝 各自 昼 各自 夜 各自
8日目 8/9 (金)	台北 夜	台北での企業等インターン シップ2日目 Zoom MT 21:30	・台北での企業でインターンシップに課題をもって意欲的に参加する。	朝 各自 昼 各自 夜 各自
9日目 8/10(土)	台北	大学生とのキャリアデザイ ンの意見交換 振り返り、成果報告の準備	・元智大学大学生とディスカッションを行い、キャリア観や就労意識の違いを検討し合う。 ・体験学習を振り返り、成果報告準備をする。	朝 各自 昼 各自 夜 各自
10日目 8/11(日)	台北 午後 夜	12:00-14:00 成果報告・意 見交換会 学生寮で別荘レパーティー	・体験学習成果を報告し意見交換を行い課題を整理するとともに、感謝の気持ちを表す。	朝 各自 昼 あり 夜 あり
11日目 8/1(月)	台北 東京	13:00 元智大学→桃園 (15:40)→成田(20:05)		朝 各自

秋学期には、台湾や台湾の人々、キャリア、台湾と日本のつながりなど、現地での体験学習で学んだことを振り返りながら、ポスターや報告書、動画を作成することを通して「体験の言語化」を図った。こうした学びの成果をまとめ表現する活動を通して、自分自身のキャリアデザインについての見方や考え方がどのように変化したり深まったりしたのかについて内省的に検討を行った。

2 キャリア体験学習の前後での変化

ここでは、現地台湾でのキャリア体験学習を実施する前後での学生の変容について、学生による自己評価、台湾のイメージの変化をもとに検討したい。

（１）学生による自己評価にみる変容

では、キャリア体験学習を通して、学生にはどのような変容がみられたのだろうか。キャリア体験学習の前後で実施した学生による自己評価をもとに検討したい。

キャリア体験学習では、春学期の最初の授業（1

回目）と台湾でのキャリア体験学習を終えた秋学期の最初の授業（2回目）において、（1）～（6）の項目に関して、4：十分できる、3：ある程度できる、2：あまりできない、1：できないの4件法による自己評価を実施した。その結果は、表2の通りである。

それぞれの項目について履修学生10人の平均点の変化をみると、（1）台湾の政治・経済・社会・文化についての概要を説明することができる（1.5→3.1）、（2）台湾と日本との関係について説明することができる（1.8→3.3）、（3）台湾人と日本人とのキャリア観や就労意識の違いについて説明することができる（1.8→3.6）、（4）台湾人との違いから、日本人である自分自身について考えることができる（1.2→3.7）、（5）台湾の人々と効果的にコミュニケーションをとることができる（1.3→3.6）、（6）キャリアデザインについて、グローバルな視点から意見を述べることができる（1.1→3.6）という結果であった。

このように自己評価の結果からは学生の間では大きな成長がみられ、台湾の政治・経済・社会・文化についての概要、台湾と日本との関係、台湾

表2 学生による自己評価

	A		B		C		D		E		F		G		H		I		J	
	1回	2回	1回	2回	1回	2回	1回	2回	1回	2回	1回	2回	1回	2回	1回	2回	1回	2回	1回	2回
(1)台湾の政治・経済・社会・文化についての概要を説明することができる。	1	2	2	3	2	3	1	2	1	3	2	4	1	4	2	3	1	3	2	4
(2)台湾と日本との関係について説明することができる。	1	3	2	3	2	3	1	3	2	3	2	3	2	4	2	3	2	4	2	4
(3)台湾人と日本人とのキャリア観や就労意識の違いについて説明することができる。	1	4	1	4	2	3	1	4	1	4	1	3	1	3	1	3	1	4	2	4
(4)台湾人との違いから、日本人である自分自身について考えることができる。	1	4	1	4	1	4	2	3	1	3	1	4	1	4	1	3	1	4	2	4
(5)台湾の人々と効果的にコミュニケーションをとることができる。	1	3	1	4	1	3	1	3	2	4	1	4	2	4	1	3	1	4	2	4
(6)キャリアデザインについて、グローバルな視点から意見を述べることができる。	1	3	1	4	1	3	1	3	1	4	1	4	1	3	1	4	1	4	2	4

注 4：十分できる、3：ある程度できる、2：あまりできない、1：できない

人と日本人とのキャリア観や就労意識の違いについて、説明できなかった学生が、説明することがおおむねできるようになったと感じている。また、台湾人との違いから、日本人である自分自身について考えること、台湾の人々と効果的にコミュニケーションをとること、キャリアデザインについて、グローバルな視点から意見を述べることにについて、できなかった学生が、少なくともある程度できるようになったと回答していた。

以上のように、10人の学生は、本プログラムを通して、台湾やキャリアについての知識や台湾の人々とコミュニケーションをとることへの自信を獲得し、台湾人との違いを通して日本人としての自分自身について、また、グローバルな視点からキャリアデザインについての考えられるようになったという点で、大幅な自己評価結果の改善がみられた。

(2) 台湾のイメージの変化

ここでは、キャリア体験学習（国際・台湾）を通しての台湾のイメージの変化についてみてみたい。春学期の最初の授業（1回目）と秋学期の最後の授業（2回目）で、台湾のイメージについてパワーポイントのスライド1枚に表現するとともに、その説明を書く課題を設定した。3人の学生の2回目の記述を示すと以下の通りである。

・授業が始める前に、台湾のイメージと聞かれて思いつくのはタピオカなどの「食」と半導体で有名な「TSMC 社」だった。しかし、この台湾の授業を通じて、「日本との深い関係」と「台湾人の温かさ」を知った。調べてみると、台湾に関するニュースが週に1回は新聞に載っていたり、インフラを通じて古くから日本とかわりがあることを知った。また、実際に台湾に訪れ、現地の人々と交流する中でその優しさを実感した。一緒に行動してくれた台湾の学生たちは私たちの希望通りに計画を立ててくれ、インターン先の方々も丁寧に説明をしてくださった。さらに、国を知るには「実際に訪れる重要性」と「一つの場所だけでは

その国の一面しか見えない」ことを学んだ。この経験を通じて自身の視野を広げることができたと思う。今後は様々な国を訪れ、現地の人々と関わる中で、多角的な視点からその国の特徴や課題に触れていきたい（F）。

・私がこのキャリア体験国際台湾で学んだこと・イメージとして印象に残ったことは台湾と日本での就業意識の差と社会に出てからの学習意欲や環境の差である。日本でもある程度勉強して行っただが、台湾で実際に大学生とお話したり、インターン先で対談を行ったりしてよりそれを実感した。学生においては大学生の間は学業に専念し、就職活動等は行わず、専門的な勉強、他にも留学など自らより良く学ぶ環境を求めにっている生徒がほとんどであるのではないかと感じた。この点においては現代の大学生が見習うべきところであると感じる。社会人でもスキルアップや海外での実践的な学びや情報を常に更新していることが現地に行ってみてわかった。何も知らない状態での台湾のイメージでは観光地や食のイメージがほとんどを占めるほどとても強かったが、現地に足を運んだことで台湾の教育事情やモチベーションについての興味がさらにわいた（J）。

・人：台湾の人は物事をはっきりというというイメージから、……確かに嫌なものは嫌とはっきり言うけれどもその清々しさはむしろ心地よく、どこか茶目っ気もあって接しやすい方々ばかりでした。日本からきて不慣れな環境にあわあわしていた私たちを、温かく、ドンと構えて受け止めてくださる人柄により親しみをもち、大好きになりました。

食：実際訪れてみると、意外とクセの強いものばかりではなくて、台湾ならではのタピオカや屋台飯もある一方で逆にモスバーガーやマクドナルドのような私たちの口にも合うようなジャンクフードや、おしゃれなカフェなどもあり、日本人が寿司しか食べないと思われているような偏見を持っていたのかもしれないと思いました。食よりもむしろ匂いの方が日本と大きくギャップを感じました。

文化や意識：秩序がきちんと保たれていて、電車の中で水を飲めないルールが意外と厳しいこと、車内ではうるさくしないことや、エスカレーターをちゃんと片側に寄ること、列にちゃんと並ぶことなど、日本と似たような文化を感じました。同時にバスの到着がとんでもなく遅れたり、運転手さんが私服だったり、降りる客に向かって「走れ!」と叫んだりすることには驚きました。しかし、日本以外は治安が悪く、危険だろうと恐れていた割には拍子抜けするほど安全で、適応しやすい文化でした。キャリア意識に関して、……職場でのフランクさや、大学生が意外と就職に関してそこまで早い段階では考えていないこと、学生がアルバイトをしていないことなどは現地の人に話を聞いて初めて知ったことでした（C）。

台湾のイメージは、1回目のスライドではほとんどメディアでもよく取り上げられる料理、九份、半導体といったものが多かった。それが、現地研修を経た2回目においては、優しく親切、温厚、親日など実際の経験にもとづく台湾の人々についての記述が多くなる傾向にあった。また、食、キャリアなどの同じトピックを取り上げるにしても、実体験を踏まえたより具体的な内容に変わっていた。台湾についてのイメージの広がりや深まり、あるいは、イメージしていなかったものへの着目などのイメージの変容は、実際に台湾で経験したことの効果の表れであるといえる。

3 キャリア体験学習の4つの経験

では、学生は台湾でのキャリア体験学習においてどのような経験をしたのだろうか。ここでは、（1）現地でのインターン・企業等訪問、（2）法政大学台湾校友会の会員へのインタビュー、（3）元智大学学生との交流と寮生活、（4）台北、台中、台南でのフィールドワークの4つの観点から検討する。

（1）現地でのインターン・企業等訪問

キャリア体験学習では、異なる言語や文化のもとで働くことについて体験的に知るために、2日間のインターン、および、企業訪問を実施し、2024年度については、①インターン先としては、（1）日立ハイテク、（2）遊学台湾、（3）東北ジャパンネットワーク、（4）律師事務所、（5）凌巨科技、（6）台灣奇士美化妝品（kiss me）、（7）瀧澤科技、（8）東野精機、②企業等訪問先としては、三信商業銀行、新竹サイエンスパークであった。こうした経験をもとに、台湾における③就労意識・キャリア観についての考察も行っている。学生の振り返りの記述をもとに概要をみると、以下の通りである。

① 8か所の企業でのインターン

・東野精機：自社商品の製造販売や半導体事業等の業務委託：工業系の企業の見学、製品の製造ラインやエンジニア室の見学をすること、……また、各部門の部長や社長などと実際にお話することができ、多くのことを学ぶことができた。……今後の自分のキャリアデザインの中で、“転職によるキャリアアップ”という選択肢を持つことができた（A）。

・日立先端科技：半導体製造の様々な工程のうち、エッチングと CD-SEM という装置でその検査を行っている企業：日立ハイテクという一つの会社を見ることができ、とても貴重な経験をすることができた。日立ハイテクの社員は日本語堪能な方が多く、改めて海外で働くうえで、言語は非常に大事なツールだと感じた。……企業の方へのインタビューでは台湾と日本のキャリア観の違いを感じた。……自分のキャリアアップをして様々な経験を生かして成長できる、そんな働き方も素敵だなと感じた（B, F）。

・台灣奇士美化妝品股份有限公司（KISSME）：日本の化粧品メーカーである株式会社伊勢半が展開するブランドの一つ：特に印象に残っている社長の言葉は、「少しのメイクをするだけで、人は美しくなり、自信を持てる。その自信がさらに自分を美しくしてくれる」というものである。……

深く感銘を受けた (C)。

・台湾趨勢法律事務所：台湾内外の不動産関係、民事訴訟、離婚訴訟などを扱う法律事務所：インターン先の法律事務所の方々は優しく丁寧に多くのことを教えてくださり、法律について興味を持つきっかけとなった。……インターンを通して感じたことは、台湾では女性が活躍する場面が日本よりも多いということだ。……、女性の弁護士が多くいたりなど、日本よりも女性が活躍していることが印象に残った (D)。

・遊学台湾：台湾への長期語学留学や大学進学、ワーキングホリデーをサポートする台湾専門の留学エージェント：今自分が何のために動いているのか把握して働くことが大切であると学んだ。語学学校と空港のリサーチも、集めた情報を何に使うのかを理解してから動かなくては的確な情報を集められないし、ブログの執筆も誰にどんな情報を届けて、どう思ってもらうのが目標なのかを意識しなければズレたものになってしまう。社長に、社会人として大切なことを伺った時に教わった、「やるかやらないか迷ったらやる方を選ぶ」というお言葉も強く心に残っている。……。このように選択していくことは社会人として大切だと感じた (E)。

・凌巨科技：小型から中型の液晶ディスプレイやタッチパネルモジュールの設計および製造：(1日目、) 各部署を案内していただき、……2日目は、台湾で働く日本人の方々にお話を伺った。台湾の方は「自分の仕事は自分で、そこからの仕事は他の人の担当だから」といった傾向が強く、引き継ぎや中継に苦労することもあるというリアルな現場の状況を知ることができた。ワークライフバランスを考える上で、私が印象的だったのは、海外に行きたい旨を会社とのキャリア面談の際に、毎回言っていたという女性駐在員の方のお話だ。私生活が落ち着いたタイミングで上手く海外で働くチャンスを掴んだと聞いて、目標を伝え、それまでにキャリアを積むことの大切さを再認識した (G)。

・東北ジャパンネットワーク：①観光地のインバ

ウンド支援や現地 PR、②海外進出を考えている個人、法人へのサポート、③国や商品の選定やデータ提供などの貿易支援：東北ジャパンネットワークは日本のインバウンド支援や海外進出支援、貿易支援をする会社であり、ランドオペレーターの役割も果たしている。お客さんと旅行会社をつなぐ会社なので、2つの立場に立って考えることが必要、……多文化や多言語を理解する事は国を跨いで事業を行う会社では大切だと学んだ (H, I)。

・台湾瀧澤：旋盤やフライス盤などの工作機械を製造：インターンシップを経て感じたことが2つある。1つ目は、台湾瀧澤の方々をはじめ台湾の方々は働く上で家庭や会社内での人間関係を特に大切にしていることだ。……2つ目はキャリア観・教育への意識の違いである。……台湾では自分の将来を見据え専門的な知識を学ぶために大学・学部を選び、さらには大学院への進学や海外留学をしてきた方がとても多いと感じた (J)。

②企業等訪問

・三信商業銀行：法政大学台湾校友会会長の廖松岳さんが理事長を務める銀行：銀行では自分たちをととてももてなして下さり、会長というとかたいいメージがあったが、気さくに話しかけてくれてためになる話をいただけてとてもうれしかった (F)。日本語でキャリアについて説明して下さって、将来に活かせる学びを多く得ることができた。(G) お客様との信頼関係が何よりも大事ということ、信頼関係を築くために常に相手に誠実でいることが大事だと学んだ (I)。

・新竹サイエンスパーク科学園区探索館：最先端技術を利用した製品見本などの資料館：様々な電子機器が展示してあって改めて台湾が技術面で優れていることを実感した (J)。台湾の半導体事業だけではなく医療や流通など様々な分野で科学技術が発展した。台湾が世界経済に与える影響について今後も注目していきたい (B)。新築サイエンスパークでは数多くの新未来が見えました。この説明をしているスタッフの方がネタも言いながら難しい日本語を話していて感心しました (D)。

③就労意識・キャリア観

・働き方は先進的で、ライフワークバランスを意識しながら、人生の中心が仕事というよりも生活の一部として仕事があるような様子だった。趣味にも多く時間を割くため、人生が充実しているように思う（E）。日本よりも転職が一般的で自分のキャリアアップのために前職を活かしている。日本では終身雇用、年功序列が一般的だが、台湾ではそんなことなく女性が活躍していると感じた（B）。転職やスキルアップを見据えることを当たり前として働ける（J）。

・台湾人は、“切り替え”を大変重要視する。例えば会社の昼休みの時間を比較的長くとり、昼寝をするという「昼寝の文化」が根付いている。昼休みになると会社の照明をすべて落として、全社員で一緒に昼寝をする会社も少なくはないようだ（F）。台湾ではポロシャツやTシャツなどラフなスタイルが多くてとても良いと思った（B）。人間関係のフランクさに驚きました（C）。

・海外で働く上では常にアンテナを張り、自分から積極的に行動して人脈を広げ、伝えたいことを曖昧にせずにはっきり言葉にすること大切であると学んだ（E）。海外で働くことの難しさとしては、やはり言語の違いによって企業内の人との交流はもちろんのこと、取引先の人との交流をするうえでコミュニケーションの面で難しさがあるなと感じました（A）。

こうした振り返りの記述をみると、現地でのインターンや企業等訪問で見聞きすることで学生はそれぞれ、異なる言語や文化のもとで働くこと、日本との就労意識とキャリア観の違いなど、グローバルなキャリアについて実感を伴った理解ができたことが伺える。とくに1企業につき1人か2人という少人数で乗り切った2日間のインターンシップの経験は印象に深く刻まれており、海外で働くことのやりがいや可能性、難しさについて体験的に理解することができたのではないかとと思われる。

（2）法政大学台湾校友会の会員へのインタビュー

法政大学の卒業生で構成される法政大学台湾校友会の協力を得て、国際的にも活躍されている陳春裕さん、陳致宇さん、三浦直矢さんの3名の先輩方をお呼びし、キャリアをめぐってのお話をお聞きした。冒頭で5分程度ずつ3名の皆さんに順番に話をしてもらい、その後グループになって、準備してきた質問を中心にしながら20分程度ずつ質疑応答を行った。学生の振り返りの記述の一端は、以下の通りである。

・陳春裕さん 勸業科技股份有限公司：とにかく言語を学ぶことが大事だとおっしゃっていた。英語も、今の一番頭が柔らかい時期に覚えておくべきだと学んだ（G）。言語力があるだけでキャリアアップのスピードが違うというのを聞いて、これから多言語を学び、言語力の向上を目指していきたいなと感じました（A）。不安な気持ちがあってもなんでも挑戦してみる、一歩踏み出してみることが大切だと知りました。（I）自分の将来についてどう考えているのかを尋ねてくれてその時に海外にでるとどのようなメリットがあるのかという事についてアドバイスをいただいたので将来に活かしたいと思いました（H）。

・陳致宇さん 商社：外資系企業に入社するために必要なことだったり、転職を経て台湾でキャリアアップをする方法を教えていただいた（F）。将来的に語学ができるだけでは足りず、それで何ができるのが大事であると語ってくださった（E）。現在外資系の企業で働いており、ライフ・ワークバランスの充実した日常の素晴らしさを教えていただきました。外資系企業は互いに関係がフランクで、忖度もなく、意見が言いやすい環境であるとおっしゃっていました。やはり英語を話せることは大切な能力で、とにかく英語は勉強したほうがいい、と教えていただきました（C）。

・三浦直矢さん 政治大学大学院：台湾研修の先輩である三浦さんは、私たちと同じ研修をきっかけに台湾に惹かれ、大学院に進学したというその

行動力が素晴らしいなと感じた。語学を身につけるために留学をするのではなく、語学力がある前提でその言語を用いて学問を習得するということはレベルが高いことであるが、挑戦することによって相当の自信と学力、語学力が身につく、世界が広がることがわかった (E)。大学生のうちにいろんなことを試しに少しずつやってみることで自分の得意不得意などを理解することができるので、将来の選択肢を増やしたり、今後のキャリア形成の手掛かりになるかもという話を聞いてこれまでに持っていなかった考え方だったので試してみたいなと感じました (A)。

グローバルに活躍している法政大学の先輩からお話を直接聞いたことで、学生にとっては、語学の大切さ、海外の企業で働くこと、外資系企業の特徴、異なる文化のなかで生きること、挑戦することの大切さなどについての視野を広げる機会になったと思われる。法政大学台湾校友会の先輩方との交流を通して、グローバルにキャリア形成をしていくことについて多くのことを学んだことが伺える。

(3) 元智大学学生との交流と寮生活

キャリア体験学習は、法政大学の海外協定校でもある元智大学の協力のもとに実施している。オリエンテーションでは、応用言語学科の学生とグループワークを行った。また、学生寮では、台湾人学生と共同生活をし、フィールドワークにおいても行動を共にした。交流についての学生の振り返りの記述には、以下のものがある。

・台湾では大学在学中は学業に励み就活どころかアルバイトをしている学生も少ないという印象だった。大学での学業が学生の本分である (B)。学生であれば、大学受験もただ入るだけでなく、専攻したいものに向かって入学し、大学院進学や留学を視野に入れている学生が多かった (J)。台湾の学生と話す中で、自分の人生に当事者意識を持ち、自律して、自分で自分の人生を決めること

の大切さを知った。私はまだまだ親や周りの方々に甘えていたなと実感した (E)。

・台湾の方は日本の方よりも語学堪能な人が多いため、海外で働いたり外資系の会社で働いたりとその力を働く際に生かすことが当たり前になっているという (E)。元智大学の学生に話を聞いたところ、「台湾人は小さい頃から学校で英語を習っており、英語は日常会話程度なら話せる人が多い。また、私の周りには多言語を話せることを強みとして将来仕事をしていきたいと考え、言語を学んでいる人がたくさんいる。」と話していました (I)。

・海外で私たちと同世代の人たちと交流する機会はとても貴重なことなので緊張していたが、互いに日本語や台湾語で話したり、困ったことがあればフォローしたり優しい元智大学の学生たちのおかげで充実した体験ができた。はじめは話の話題などに困ったが、TikTok や K-POP など日本の友達と話すような内容で盛り上がる事ができた。……現地の学生から犬カフェやショッピングに誘ってくれるなどとても親切にしてくれた。最終日には感謝の思いでいっぱいでお別れするのが寂しかった (B)。……元智大学の学生たちとの寮生活で、台湾人の親切さや寛容さ、おもてなしを感じることが幾度となくありました。出会ってから日が浅くても、文化の違いや趣味についての会話がたくさんできて、台湾ならではの人同士の距離の近さを感じることができました (G)。

寮生活やフィールドワークを共にし、仲良くなったことで本音を出して会話ができていたことが伺える。日本と台湾の間における大学生の就活についての意識、キャリア観や就労意識の違い、台湾の学生のおもてなしへの感謝や国際交流の楽しさなど、元智大学の学生との交流の体験から学んだことは少なくないと思われる。

(4) 台北、台中、台南でのフィールドワーク

日本との関係の深さ、それが台湾の人々の人間観やキャリア観に与えた影響なども視野に、台北、

台中、台南においてフィールドワークを実施した。学生はグループに分かれ、台湾の学生の協力を得ながら、自分たちで計画を立て行動した。学生の振り返りの記述をもとに概観してみると、以下の通りである。

・台北：最も印象に残っているのは台湾博物館で見た「發現臺灣 (Discovering Taiwan)」の展示である。ここでは、様々な学者や探検家が、かつて外の人々にまだ詳しく知られていなかった頃の台湾を探検して見つけたものが紹介されていた。ほとんどが日本人の学者であり、私たち日本人も名前を知らない日本人が台湾の植生や地理、先住民のこと、昆虫や動物などについて調べていたことを知りとても驚き、日本との関係の深さをまざまざと見せつけられたと感じた (E)。日本語でキャッチをしている人もいて、日本との関係を感じた。タクシーに乗っても“日本人”という言葉が通じたりした。日本のルールやマナーたしなみを知っている方もいてみない人だった (F)。九份は日本の竹下通りのようにたくさんのお店が並んでいてとても面白かったです。食べ歩きを楽しめるだけでなく、提灯や街灯などの灯りや高台から見る自然など景色もとてもよかったです。台北は交通機関が充実しており、日本の東京のようでした。しかし、交通費は日本よりも安かったです (I)。

・台中：九族文化村が印象に残っている。台湾の原住民族の家や道具などの暮らしが再現されていて実際に体験ができるスペースもあった。原住民エリアでは各部族の方が実際に販売などを担当しており、お話しすることができた。ダンスステージでは原住民の迫力満点のダンスを見ることができて台湾の伝統文化を肌で感じるすることができた。家や道具などの暮らしの様子を実際に見て日本の古代の暮らしに似ているところが多くあると感じた (B)。台中では宮原眼科に訪れて日本との関係の深さを理解しました。それは宮原眼科にはツアーで来ているお客さんがたくさんいてそのツアーのお客さんのほとんどが日本人だったからで

す。また、宮原眼科は日本統治時代に作られた建物ですが現在はスイーツ店として生まれ変わりました。このように台湾では日本統治時代に作られたものを新しい形で再生するという意識があるのかなと考えました (G)。

・台南：八田与一記念公園や林百貨店、延平郡王祠に行きました。八田与一のところでは遠目ではありましたが、ダムを眺めることができました。像が建てられており、そこに台湾人の方も訪問していたのを見て、台湾でも尊敬されているのだなと感じました。林百貨店は日本人が出資して作られた日本統治下の建物であり、多くの人が訪れているのもみて、日本との関わりが深いのだなと改めて感じました (A)。鄭成功の聖地を訪れた際には、軍の戦闘機と思われるものが空を飛んでいるのを見て、現在でも兵役があるという台湾の規則を肌で感じました。同時に、キャリアの観点からは、男性は兵役があるからそれが終わってから就活を始めるということを思い出し、日本との明確な違いも思い直しました。

台北、台中、台南でのフィールドワークの一端を学生の記述から概観した。日本統治時代やその当時建てられた歴史的な建造物に触れ、日本との関係の深さについて言及している学生が多かった。また、日本と対比しながら、台湾の文化について異なる点や似ている点について考察している学生もいた。これらの記述から、フィールドワークでの経験を通して、台湾の文化の理解を深めるとともに、日本とのつながりの深さを実感したものと思われる。

4. キャリア体験学習（国際・台湾）を終えての気づきや学び、培った力

ここでは、報告書にある「1年の学びを終えて」の記述を中心に、キャリア体験学習（国際・台湾）を通して、学生が何に気づき、どのようなことを学んだのか、また、いかなる力がついたと感じているかなどについて検討したい。

第一に、キャリア体験学習において気づいたことには、「言語力と行動力がいかに重要かということ」(A)、「目的や目標を持って行動することの大切さ」(E)、「勇気をもって行動することの重要性」「実際に訪れて視野を広げることの大切さ」(F)「挑戦することの大切さ」(H)などが挙げられていた。

第二に、このプログラムで学んだことについては、「キャリアアップに成功されている方の行動力の高さ」「自らどんどん行動していくことが大切であるということ」(A)、「台湾の文化、歴史、政治、教育などを知ることによって日本とのつながりや、台湾からみた日本」(B)、「台湾に関わる有名な事柄、物のみならず、実際に足を運んで肌で経験したからこそわかる普通の人なら知らないような情報」(C)、「日本との共通点や相違点」(E)、「他の国の人と交流することの楽しさ」「新しい文化や価値観」(H)、「周りの人の支えや支援があってこそ自分の恵まれた学習環境や生活があるということ」(I)、「現地に自ら足を運んでみてこそわかることがある」ということ (J) などがあつた。

第三に、培った力としては、「自分から積極的に行動する力」(B)、「主体性と協調性」(C)、「コミュニケーション能力」「集団行動での臨機応変に対応する力」(D)、「新しいことに積極的に飛び込む力、コミュニケーション力、情報収集力」(E)などの言及があり、「日本にいたら考えられない体験を通じて成長をすることができました」(B)、「人生の選択肢が広まった」(G)、「自分の考えや視野を広げることができた」(H)、「価値観を大きく広げ多角的な視野を身につけることができました」(J)などといった言葉もみられた。

最後に、キャリア体験学習での学びを終えての今後の展望として、「この学びを今後のキャリア形成に活かしていきたい」(A)、「もっと言語学習に力を入れていくとともに、チャンスがあったら迷わず飛び込んでみようと思います」(B)、「この経験を活かして今後の自分のキャリアを築していきたい」(H)。「今後の自分のキャリアや人生に活かせると思います」(D)、「この学びを活かし、

今後の人生を豊かにしていきたい」(E)、「台湾でできた友人と多岐にわたる情報交換を続けていきたい」(F)などの思いが書かれていた。

学生によって表現の仕方は異なるものの、台湾現地でのキャリア体験では、初めての経験が多くさまざまな気づきや学びがあり、また、行動力やコミュニケーション力などの力をつけることができたといった記述が共通してみられた。さらに、学生の多くに、今回の体験学習で得られた成長を今後活かしていこうという意欲の高まりがみられた。10人の学生それぞれの記述の詳細については、表3を参照されたい。

おわりに

本稿では、キャリア体験学習（国際・台湾）における学生の経験と変容を明らかにするために、台湾での現地研修の前後での学生による自己評価や台湾のイメージの変化、キャリア体験学習の4つの経験（(1)現地でのインターン、企業等訪問、(2)法政大学台湾校友会の会員へのインタビュー、(3)元智大学学生との交流と寮生活、(4)台北、台中、台南でのフィールドワーク）、同体験学習プログラムを終えての気づきや学び、培った力などについて検討してきた。

10人の学生はそれぞれ、キャリア体験学習プログラムを通して、異なる言語や文化の海外での影響のもとで、これまで知らなかった台湾と出会い、たくさんの台湾の人々に関わりをもち対話を交わすといった経験を通して、実体験をもとにした気づきや知識を獲得したものといえる。また、かれらの振り返りの記述からは、学生の多くが、台湾の人々とコミュニケーションをとることに自信をもてるようになり、何事にも挑戦することの大切さを学び、キャリアデザインをグローバルに考えていこうとする意欲が高まったことが伺える。2024年度のキャリア体験学習のプログラムは、履修した学生にとって、視野を広げ、自分自身を成長させるもので、今後のキャリア形成に少なからぬインパクトを与える契機となったのでは

ないと思われる。

本稿では、学生の記述を中心に、キャリア体験学習（国際・台湾）における学生の経験と変容についてのおおまかな傾向を示すことはできたが、グローバルな多文化社会を効果的に生きるためのどのような「異文化間能力」（松尾 2021）が培われたのかの分析については、十分に行うことはできなかった。今後の課題としたい。

引用・参考文献

栗山有子（2024）「キャリア体験学習（国際・台湾）から考えるグローバルキャリアー 2020～2023 年度の国内代替体験学習と海外現地体験学習を中心に－」『法政大学キャリアデザイン学部紀要』VOL.21、

75－108 頁。

早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター編（2016）『体験の言語化』成文社。

子島進・藤原孝彰編（2007）『大学における海外体験学習の挑戦』ナカニシヤ出版。

松尾知明（2021）「異文化間能力とグローバル体験学習プログラムーキャリア体験学習（国際・台湾）を事例として」『法政大学キャリアデザイン学部紀要』VOL.18、3－14 頁。

森茂岳雄・津山直樹「多文化体験学習における学びの言語化：物語論的アプローチの試み」、村田晶子編（2016）『大学における多文化体験学習への挑戦』ナカニシヤ出版。

表3 1年の学びを終えて

A	特に心に残っていることは、言語力と行動力がいかに重要かということです。法政大学の卒業生である法政校友会の先輩方の話の中で、“言語力があるかないかでキャリアアップのスピード感や仕事の幅が大きく変わってくる”、“言語力はどんな仕事のスキルよりも実践的に活用することのできる重要な力である”というお話をこれまでの自身の経験をもとにお話ししていただきました。そのお話を聞いたことに加えて、台湾で実際に生活する中で言葉が通じないことへの大変さを実感し、言語力の重要性を肌で感じることができました。この経験から大学生という時間の制約が少ない今のうちに言語力を身につけるための勉強に励もうと感じました。また、台湾では経営者の方など色々な社会人の方と直接お話をさせてもらう機会がありました。お話しさせていただいた皆さんがおっしゃっていたのは「失敗を恐れずに挑戦すること」がどれだけ大切なことかについてでした。何事も挑戦しないとまず可能性もない、挑戦して失敗する経験から多くのことを学び成長できるなどの話を聞いて、まず挑戦することの重要性を再認識し、キャリアアップに成功されている方の行動力の高さを実感することができ、とても貴重な経験となりました。
B	私はこの11日間の体験を通して、自分から積極的に行動する力がついたと感じています。事前学習や当日のフィールドワークでは自分たちで考えて計画を立てたり、中国語で企業の方やタクシーの運転手さんとお話したり日本にいたら考えられない体験を通じて成長をすることができました。それまでは言語の壁や、文化、宗教の違いなど「海外」とひとくくりにして、異文化を体験するのは怖いと躊躇していましたが、電車の乗り換えやお店の中での会話など様々な場面で困ったことがあってもインターネットで調べるばかりでなく、積極的に現地の人に聞いて行動することができました。完璧な中国語、英語ではありませんでしたが、台湾の方は一生懸命理解しようとしてくれたり、知っている日本語で伝えてくれたり人の温かさを感じる瞬間が多くありました。海外の文化や人々にもっと触れたいと感じたのでこれからもっと言語学習に力を入れていくとともに、チャンスがあったら迷わず飛び込んでみようと思います。

C	春学期の事前学習、夏休みの現地体験学習、秋学期の振り返り、全ての時間に大きな意味があり、この1年間で台湾について学ぶにあたり欠かすことのできない学びの時間だったと思います。私はこの体験学習での学びを得るまでは台湾についての知識はほぼゼロに等しく、中国語も挨拶しかできない程度でした。しかし、春学期の事前学習で歴史や文化、言語を学び、現地での体験をイメージしながら台湾の色に自分を染めていくことができました。現地の体験学習では本当にたくさんの人からたくさん学びと、信頼とパワーをいただきました。秋学期は現地での一瞬一瞬の経験を思い出し、アウトプットすることができました。今では台湾に関わる有名な事柄、物のみならず、実際に足を運んで肌で経験したからこそわかる普通の人なら知らないような情報も知ることができました。何より私自身が成長することができたと思う点は、何事にも一歩踏み出す勇気です。この台湾での体験学習は、私の人生において本当にかけがえのない11日間であり、1年間であったと思います。
D	私がこの台湾プログラムを履修しようとした理由は自分を変えたかったからです。私は元々自分に自信がなくチャレンジしてみることが苦手で引っ込み思案な性格でしたが、社会に出る前の大学生という限られた期間の中で私は何事にも挑戦してみようと思ったので、この不思議で興味深いキャリア体験（国際）・台湾を履修しました。このプログラムに実際に参加し私は大きな成長を感じる事が出来ました。実際に台湾へ行きインターンシップを行い、社会人の方や元智大学生とのコミュニケーション能力が養われ、集団行動での臨機応変に対応する力も同時につけることができ自己成長に繋げることができました。また、普段生活していたら触れ合うことの出来ない異文化を体験したことで当たり前のように感じていた今の生活を見直すいい機会になりました。自分を大きく成長させることが出来たこのプログラムは、今後の自分のキャリアや人生に活かせると思います。
E	幼い頃、私にとって人生最初の海外旅行先が台湾でした。家族旅行で訪れたそのときから台湾には自然と親しみを感じていましたが、この一年を通じてさらに愛着が深まり、大好きな国となりました。1年間を通して台湾について学び、実際に訪れて多くの方々と交流を重ねる中で、日本との共通点や相違点を理解し、台湾の魅力をさらに発見することができました。私はこの台湾研修を通して、目的や目標を持って行動することの大切さを改めて実感しました。研修の準備段階として、春学期には台湾についての知識を深め、興味を最大限に引き出した状態で、目的を明確にして訪問しました。だからこそ、現地で見えるもの聞くもの全てへの解像度が高く、より多くの学びを得ることができたのだと感じました。この研修で培った、新しいことに積極的に飛び込む力、コミュニケーション力、情報収集力を生かして今後も様々なことに挑戦していきたいと思います。その中で、常に目標や目的を意識することを心掛け、自らの人生をより豊かにしていきたいと強く感じました。
F	この台湾での体験型プログラムを通して感じたことが2つあります。1つ目は、勇気をもって行動することの重要性です。私は経験がないことに対しても挑戦することを心がけており、インターン先では得意でない英語でも積極的に話し、現地の社員の方と交流しました。その結果、担当社員さんから通常の説明では知り得ない深い部分を教えていただくことができました。2つ目は、実際に訪れて視野を広げることの大切さです。台湾については食文化など一部は知っていたものの、現地で気候・文化・政治・歴史に触れ、五感を通じて理解を深めました。台湾の各地を訪れ、地域ごとの異なる雰囲気を知り、1つの国も地域ごとに捉える必要性を実感しました。また、ディスカッションや成果発表会を通じて、他の参加者が感じたことも学びに繋がりました。今後も台湾でできた友人と多岐にわたる情報交換を続けていきたいと考えています。
G	まずは率直に、台湾に行くことができて本当によかったという気持ちです。幼少期に中華圏に住んでいた経験がありながら、それをいまいち活かさないまま大学生になってしまった自分にとって、本授業はある種のターニングポイントとなりました。現地学習では、語学力を伸ばしたい、外国の方をもっと関わってみたい、という気持ちを遺憾なく発揮することができました。具体的には、元智大学の学生に興味や勉強のことを、中国語や英語を混ぜて聞いたり、法政大学校友会の方々やインターン先の日本人駐在員の方に、勉強方法をうかがったりしたことです。他にも、言葉の壁を超えて笑い合うことができたのは、自分にとって大変貴重な経験となりました。一方で、大学の代表として現地へ行っていることへの自覚も忘れずに行くことができました。日本人として、日本の歴史や魅力、ポップカルチャーを台湾でできた友人に伝えることも意識しました。11日間での経験により、人生の選択肢が広まったと感じています。

H	僕はこの1年間で台湾について多くのことを学ぶことができました。前期の事前学習では台湾の歴史と政治、中国語など今まで知らなかった知識を得ることができました。現地での学習では前期で習った中国語を使って元智大学の学生と交流しました。その交流を通して他の国の人と交流することの楽しさを学ぶことができました。また、日本では経験できないことをこの授業を通して経験することができて、良い影響を受けことができました。そしてこの体験学習を経て挑戦することの大切さを感じました。この体験学習で台湾に行くまで海外に行ったことがなく、この授業を取ることを悩んでいましたが実際に台湾に行って自分の考えや視野を広げることができたので、挑戦してとても良かったと感じました。この経験を活かして今後の自分のキャリアを築いていきたいと思います。
I	私はこの1年間で周囲の人の大切さを学びました。春学期の事前準備、11日間の現地学習、秋学期の振り返りを通じて自分の力だけで何かをすることは難しいということを強く実感しました。法政大学の仲間、先生方、台湾の現地学生、企業の方々など本当に多くの方々に助けられ、お世話になり、1人ではできないような経験をたくさんさせていただきました。私はこの授業を履修するまで中国語もほとんど話せず、台湾の知識もほとんどない状態でした。先生や企業の方々に1から知識を教えていただき、このような機会を作っていたいただければ台湾全土に渡ってフィールドワークを行うことも、企業でインターンをさせていただくことも難しかったと思います。周りの人の支えや支援があってこそ自分の恵まれた学習環境や生活があるということを1年を通して強く感じました。今後は自分の置かれた環境に感謝し、その環境下で精一杯努力することを心がけていきたいです。
J	私がこのプログラムを通して感じたことは「現地に自ら足を運んでみてこそわかることがある」ということです。私は人生において「とりあえずやってみる」ということをモットーにしてきましたが、海外に飛び出してみることへのハードルは高いと感じていました。そんな中でこのプログラムなら海外のキャリア観を学ぶことができると同時に、自分の中の壁をまた1つ打ち破り、自己成長に繋げることができると思い履修することを決めました。この1年間で台湾をはじめとする海外のキャリア観や、それに至った歴史的・文化的背景などを学び、実際に現地に足を運び体感してきました。今の時代、インターネットを使えば沢山の情報を得ることができます。しかし、インターネット上で知ることと、現地に行って五感で感じ台湾の方々とは話すのでは情報量が桁違いでした。また、1人で異国の地でインターンシップをさせていただいたことも貴重な体験でしたし、価値観を大きく広げ多角的な視野を身につけることができました。

Students' Experiences and Transformation in Career Experience Study (International and Taiwan)

MATSUO Tomoaki

This paper aims to clarify what the students experienced and how they were transformed during the career experience learning (international and Taiwanese) based on the self-evaluations by the 10 students enrolled in A-J, and the students' descriptions found in class assignments, reports, and written reports.

The program consists of a spring semester pre-enrollment study, an experiential study in Taiwan, and a fall semester post-enrollment study, and is designed to (1) deepen understanding of Taiwan's history, society, culture, and people, (2) learn the rudiments of the Chinese language, (3) interact with Taiwanese university students, companies, and members of the Hosei University Taiwan Alumni Association, and (4) conduct internships in the local Taiwanese community. (5) deepen their consideration of global career design by conducting internships in Taiwan.

Each of the 10 students gained knowledge and awareness based on their real-life experiences through the Career Experience Study program, through the experience of encountering a previously unknown Taiwan and interacting with many Taiwanese people under the influence of a different language and culture abroad. In addition, their reflections indicate that many of them became more confident in communicating

with Taiwanese people, learned the importance of taking on any challenge, and became more motivated to think globally about their career design.